



平成21年4月23日

<勝負砂古墳出土遺物の整理進む>

<概要>

- ・ 5世紀の前方後円墳である倉敷市勝負砂古墳で、2004年までに明らかになった墳丘の盛土構造について、研究成果報告書を刊行しました。
- ・ 2007～2008年に発見された未盗掘の竪穴式石室（古墳時代中期後半、5世紀後半）から出土した副葬品の整理作業が進んでいます。九州国立博物館、国立歴史民俗博物館、奈良県立橿原考古学研究所などの協力を受け、鏡・馬具などのX線CTスキャン、繊維などの有機質遺物の分析・同定などが進行中です。

・ 墳丘の盛土構造についての研究成果報告書（岡山大学文学部プロジェクト研究成果報告書7）では、前方後円墳の墳丘を縦断して盛土の構造を明らかにしており、5世紀の土木技術や古墳の築造方法を復元するための重要な材料を学界に提供しました。

・ 副葬品の整理作業は、まだ途中ではありますが、これまでのところ、次のような重要な成果がありました。

（1）九州国立博物館の高精度X線CTスキャンにより、馬具が類例の少ない鈴付きの青銅製であることが判明し、鈴の中に小石が入っているなどの細部が確認されました。

（2）鏡や短甲には、紐や、くるんでいた布が良好な状態で残っていることが判明しました。これまでわからなかった布帛の用い方を復元できる良好な資料であることが確認されました。

副葬品は、今年度中に保存処理の工程に入る予定です。

<お問い合わせ>

岡山大学大学院社会文化科学研究科
准教授 松木武彦

（電話番号）086-251-7457

tmatsugi@cc.okayama-u.ac.jp

未盗掘古墳の発掘調査

—倉敷市勝負砂古墳—

勝負砂古墳は、岡山県倉敷市真備町下二万字勝負砂に所在する、墳丘の長さ 42m の前方後円墳である。

岡山大学考古学研究室は、この古墳の墳丘や周溝の形状、盛土の構築手法、埋葬施設の形態や内容などを明らかにするために、2001 年以来 7 次にわたって発掘調査を実施してきた。2004 年度には、文部科学省科学研究費のほか、岡山大学文学部プロジェクト研究「未盗掘古墳の発掘調査」（研究代表者松木武彦）を受け、墳丘から石室直上までの盛土工法等を解明する調査を行った。その後、2007 年の第 7 次発掘調査では、岡山大学学長裁量経費「勝負砂古墳の発掘調査」（研究代表者松木武彦）を受け、後円部のほぼ中心、深さ約 4.5 m のところに築かれた竪穴式石室を精査して、多数の副葬品を初めとする多くの情報を得ることができた。

この古墳は未盗掘であったため、約 1500 年前の埋葬当時の空間がそのままの形で残されていた。副葬品の配置だけでなく、それらに本来伴っていた有機質など、通常は朽ち果てて残らない品物や情報が良好な状態で保たれていたため、千載一遇のチャンスとして、最新の技術による調査と記録が求められた。発掘調査は、倉敷市教育委員会・倉敷埋蔵文化財センターの協力を得て、考古学研究室の教員と大学院生・学生を中心に、2007 年 2 月から 7 月までの約 5 ヶ月間実施した。

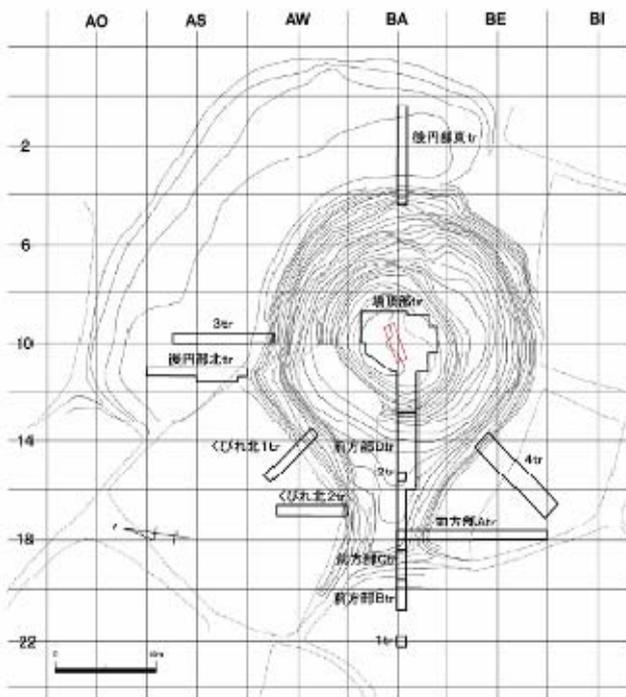


竪穴式石室と副葬品

竪穴式石室は、長さ 3.59m、幅 1.1~1.2m、高さ 0.6~0.7m で、遺骸と副葬品を配した棺を設置した後、8 枚の天井石で蓋をされ、さらに粘土で密封されている。天井石の上面および石室の壁面・床面は、主として非接触 3D デジタイザー (VIVID) により、誤差約 2 mm 以内の精度をもって記録された。

石室内には、人骨・歯のほか青銅製の鏡 1 面、青銅製の部品を含む馬具 1 式、鉄製短甲 (よろい) 1 領、鉄刀 2 本、樹皮巻の柄を付けた鉄矛 2 本、矢 3 束、鉄製農具 (鎌・斧など) 約 30 点、滑石製玉 178 点、砥石 4 点、土器 2 点など、武装具を中心とした質量ともに豊かな副葬品が出土した。型式や特徴から、5 世紀後半の所産と考えられる。これら各種副葬品の出土状況や空間的位置関係は重要な情報を含むが、きわめて脆くて失われやすいので、非接触 3D デジタイザー (VIVID) によってその正確な配置を漏らさず記録している (3D 測量は (株) 西部技術コンサルタント、(有) アイテックに依頼)。

石室に収められていた木棺は、8 点の棺金具を残してほぼ腐朽していた。その構造を確かめるために 2008 年 3 月の第 8 次発掘調査で、石室の一部に試掘溝を入れたが、その結果の整理も含めて木棺の構造を明らかにするのは今後の課題である。



墳丘の形態と調査区の配置



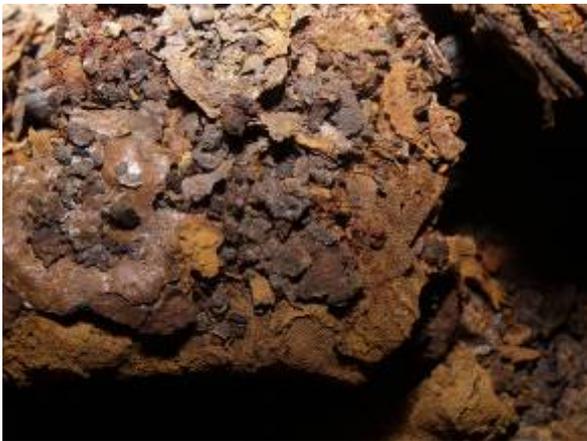
布に覆われた短甲



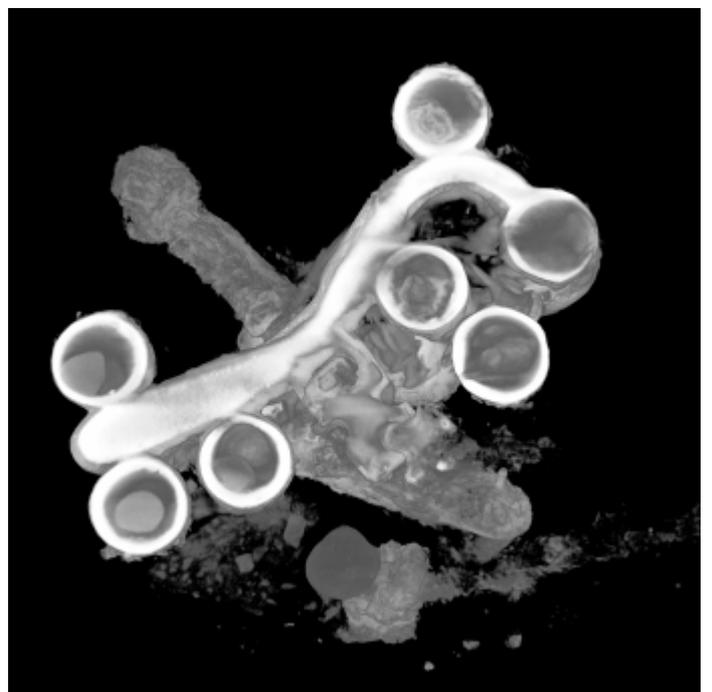
有機質の部材が複雑に絡んだ馬具



有機質遺物の取り上げ（協力・九州国立博物館）



短甲に付着した平絹と綿（協力・吉松茂信氏）



馬具の高精度 CT 写真

白く見えるのは青銅製の轡（くつわ）金具で、丸い部分は鈴。
中に小石が入っているのが見える（写真提供・九州国立博物館）。

分同定、青銅製品の成分同定、石室出土の植物遺体の
分析などを行っており、本年度からは出土遺物の形態
学的研究と展示に向けての保存処理に着手する。

石室内の副葬品は、現在、研究室に持ち帰って分析・
調査中である。多くの副葬品は有機質に覆われている
ため、まず高精度 CT スキャニングを行って内部の状況
を確認・記録した後、それぞれの破片や部品の位置関
係を検討しながら少しずつ解体し、構造および製作技
法を検討・復元する作業を行っている。

現在のところ、鏡および短甲表面に付着した繊維質
の同定、包み方などの解明が進みつつある。そのほか、
石室各所に塗布あるいは散布されていた赤色顔料の成

<勝負砂古墳関係問い合わせ先>

岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授 松木 武彦

Email: tmatsugi@cc.okayama-u.ac.jp Phone: 086-251-7457

<協力機関・協力者（五十音順）>

片山一道（元京都大学大学院理学研究科）、九州国立博物館、倉
敷市教育委員会、倉敷埋蔵文化財センター、国立歴史民俗博物
館、奈良教育大学金原研究室、奈良県立橿原考古学研究所、吉
松茂信（宮内庁正倉院事務所）。